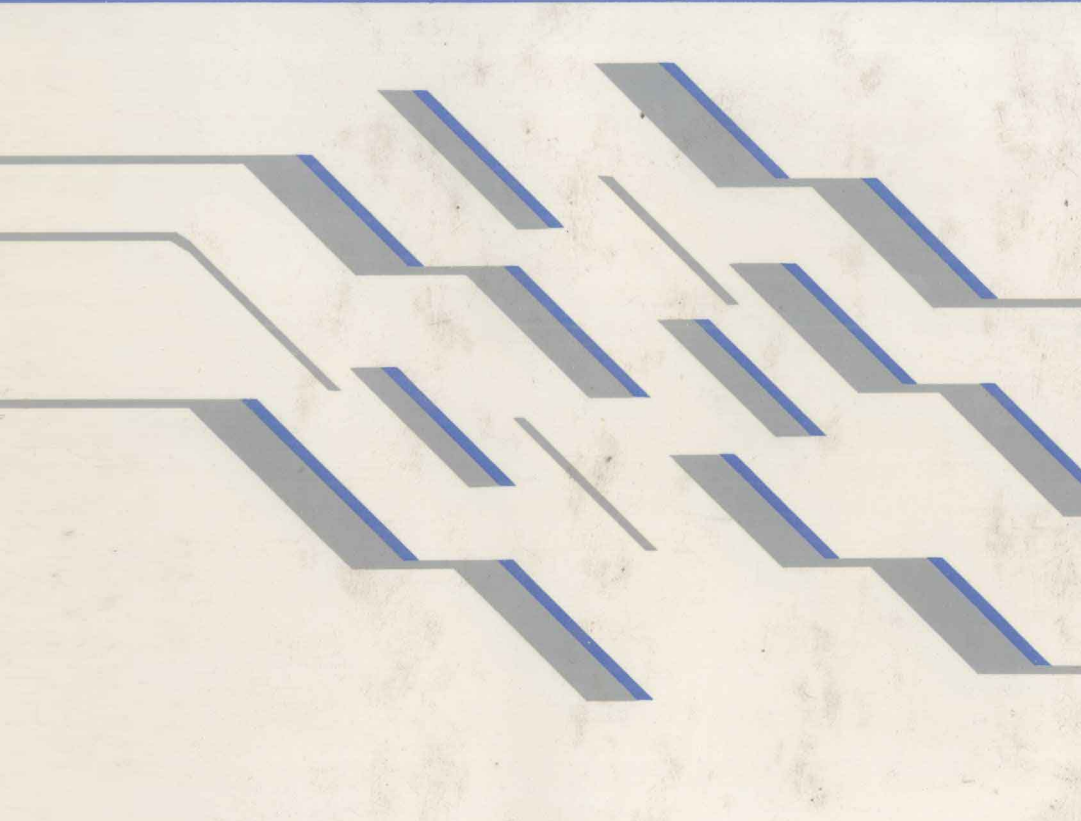


A・ヴェルジェス
D・ユイスマン

哲学教程 上

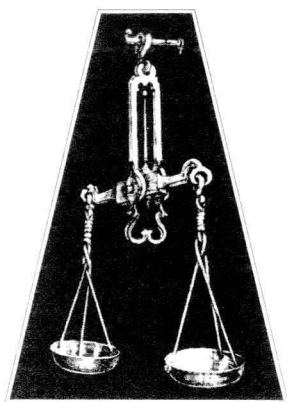
白井成雄
久重忠夫 訳
高橋 勝



筑摩書房

哲学教程 上

白井成雄
久重忠夫 訳
高橋 勝



訳者略歴

白井成雄（しらい しげお）

1933年生れ

1959年 東大仏文科卒業

現在 名古屋大学教授

久重忠夫（ひさしげ ただお）

1936年生れ

1959年 東大教養学科卒業

現在 専修大学教授

高橋 勝（たかはし まさる）

1937年生れ

1971年 東大大学院人文科学科中退

現在 浜松医科大学助教授

哲学教程 —リセの哲学（上）

1980年6月25日 初版第1刷発行

訳者	白井成雄 久重忠夫 高橋勝
発行者	布川角左衛門
発行所	株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
電話 東京 { (291) 7651 番(営業)
(294) 6711 番(編集)
振替 東京 6-4123 番
郵便番号 101-91

© 1980

0010-30701-4604

大日本法令印刷・積信堂製本

《人間と世界》

1章 人類文化の諸形態

2章 哲学の観念

3章 意識と無意識

4章 情念

5章 他者の認識

6章 空間と時間

7章 実在

8章 死

《実践と目的》

9章 人格の哲学的概念

10章 倫理と幸福

2

18

31

53

67

77

97

118

148

162

12章	正義	184
13章	国家	202
14章	労働・交換・経済・社会問題	214
15章	自由	243
16章	哲学と人間学	258
17章	美学の諸問題	272
訳者あとがき		291

下巻 目次

〈認識と理性〉

- 1章 言語
- 2章 論理的思考
- 3章 数学
- 4章 物質科学
- 5章 生あるものについての認識
- 6章 人間科学
- 7章 理性の原則
- 8章 真理
- 9章 神の問題

第1巻翻訳分担

- 1章、3～7章、12～15章
白井成雄
- 2章、9～11章、16・17章
久重忠夫
- 8章
高橋 勝

人間と世界

L'Homme et Le Monde

《1章》

人類文化の諸形態

魔術・宗教・科学および芸術

むかしから時間的にも地域的にも、多様な文明が存在しているが、それにしてもどの民族にも技術、信仰、魔術的・宗教的儀式、芸術的活動があったことは注目に値する。その内容をみればさまざまではあるが、人類の天性のこの現われはありとあらゆる所にみられ、この事實は、宗教的・技術的・芸術的（そして技術および宗教の内に科学的関心の芽ばえが存している限りにおいて科学的）な形態をとる文化というものが、人間の普遍的な本性に根ざすものであることを示している。諸文化の分析とその目録作りは人類学にまかせるとして、人類文化一般についての考察をすすめることが哲学者の役割のように思える。

S1 魔術

人間はふつう、スコラ学的定義によれば、理性をそなえた動物として通っている。しかしながら、人類の活動の最古の表現形態は全く気違いじみたものに見える。あらゆる原始社会では呪術・魔術が花を咲かせる。ここで、私たちがもつとも言いたいことは、これらの術が、錯乱の形をとった人間理性の最初の現われであり、宗教・技術・科学・芸術というような他のあらゆる文化活動の多くが、ここに由来している、ということである。

遠方の敵を殺そうとして人形に釘をさしたり、雨乞いのために数滴の儀式用の水を畑にそそいだり、あるいは愛の媚薬を調合したりする呪術師は、魔術の典型的な周知の例といえる。ホビ族のインディアンは両親が自分の誕生以前にいやでも従わざるをえなかった一連の魔術的儀式のことを、回想録『ホビの太陽』（レヴィ・ストロース序文）の中で語っている。呪術師が双子の誕生を告げると、母親は一人子を望んだので、呪

術師は双子をくつつけようと努めた。「彼は門前でとうもろこしの粉をつかみ、日なたに撒いた。彼は白糸を紡ぎ、黒糸を紡ぎ、二本を合せて母の左手首にまきつけた……。いろいろな儀式の際飾られる蛇像に母はもう眼を向けなかった。というのも子宮の中で私が遊蛇になって、出産の際、出口を求めて頭をさげずに、鎌首をもたげる危険性があつたからだ。父親はどんな動物にも危害を加えないように注意を払つた。そんなことをしたら私が不具になるかもしれないというわけだ。もし父が何か生物の足を傷つけたとしたら、私は手なしで、あるいは足がねじれて生れる可能性もあつたのだ。……父は母にいたちの肉を食べさせた。というのは私が敏捷であるように、そしてまたこのすばしこい小さな動物が穴から出る時のように私がすつと生れるように、との願いからであつた」。

以上の例は、魔術的錯乱の本質が何であるかをはっきりと示している。魔術師は心理的手段を用いて自然に働きかける。彼は、風や雨が怖がるように呪いをかける。この世界を作り上げていく種々の力は、言葉で誘惑し手なすけ、導きうるのだ。世界は魂でいっぱいであり、魔術は「アニミズム的策略」以外の何物でも

ない。魔術師は「耳もとでぶんぶんうなっている精霊の一大合奏にとりかこまれたオーケストラ指揮者」のようなものだ、と考古学者サロモン・レイナックは言っている。主観的に見て類似が存すると、それが客観的行動の手段として考えられてしまう。象徴を獲得する者は、同時に事物をも獲得するというわけだ。

ヴォルテールが信じていたように、魔術師は「自然のなしえないことを行う秘密」を自分は握っているのだと言いはるのだろうか？ 実際には、未開人は自然と超自然をほとんど区別しない。この区別がはつきりするのには、科学が盛んになり私たちが自然法則とか機械的因果関係コイザリケという考え方に慣れるようになってからのことである。だがいずれにせよ、呪術というものは、この世には俗人には知られない何か隠れた力が存在しており、魔術師はその力を我が物としたのだ、という考えと結びついている。魔術のもつこの神秘的で秘密めいた性格は、呪術師がふつう弟子達にしか自分の手口をあかささない（秘教的伝達）という事実によつていっそう強められる。実践の面では失敗続きだということに、なぜ魔術が連綿と続いたかという点は解明されるべき問題である。現実には、魔術は人間の欲望や情念の

烈しさによって支えられていたのであり、そしてこれらの欲望や情念を魔術は満足させようと主張していたのだ。生死・健康・病氣・幸運・不幸を司る力を手なづけようとすると人間の欲望は非常に強く、その結果経験のもたらす苦い教訓は曇らされ、忘れられたのである。他方、魔術がもつ制度的側面、共同体に根を張ったその組織、魔術の儀式的広汎な普及、祭司達の權威などが、魔術が失敗した際におちいりかねなかった信用失墜から魔術を広く守ってきたのであった。

私たちが所有する近代科学という高度な立場からみれば、魔術は夢、想像上の活動にすぎない。その心理的・象徴的手段は物質界の現実の法則を全くわきまえていない。だがあらゆる人類文化は、この原初の魔術にすっきり根ざしているのだ。

(a) 技術の芽は魔術師の気違いじみた方法の内に存している。魔術師とは、何よりもまず事物を変化させようと願う人間だからである。彼にとつて世界は、自分が無力なまま眺めているだけの、単なる風景ではなくなる。魔術の思い描く夢は人間が宇宙の玩具でなく造物主になって、自分の掟を宇宙に口授することなの

である。因果関係という考え方は（これは本質的には技術的なもの、プロメテウスのものである。M・プラディヌは原因とは「作り出すもの」のことだと言っている）魔術の儀式中に顕著に見られる。たしかに魔術師が依っている因果関係は想像上のものである。少なくとも、物質界に働きかけようとして用いる因果関係は、私たちを説き伏せる、恐がらせる、魅するというような心理的因果関係をモデルにして不当に想定されているのである。だが、いくら失敗しても、技術的な因果関係への要請は強く、いつまでも続く。魔術の妄想を通して、人間は自己の力への信を高らかに口にして止まない。

(b) 宗教は、その淵源で魔術と密接に結びついているようにみえる。魔術は「あらゆる形態の神秘主義の第一の源なのだ」といってそれは、魔術が超自然の領域への通路だからというわけではない。なぜなら魔術師が手なづけたと思っている力とは、自然の力そのものなのだから。そうではなく、魔術がすでに一種の神秘神学だというのも、それは魔術が呪術師やその弟子達を、大自然に生命をふきこむ力と一体化させるからである。それに、魔術は自然的な力と共感するのだ

と主張するが、だからといって、その力が姿の見えない、神秘的な力であることには変りがない。不可視の世界が存在することを認めること、またその世界に人間が参加し共感できるのだと信じることにより、魔術は宗教を準備する。

(c) 魔術はまた科学の一つの源でもある。科学的決定論という考え——これによれば現象は勝手気ままに生来するのではなく、厳密に決定された存在の諸条件に依存する——がすでに魔術師の信念の中に存在している。魔術に関して最も透徹した洞察を示した歴史家の一人フレイザーは、次のような指摘をしている。

「同一原因は決してあやまたずに同一結果を生む、このことを魔術師は絶対的に確信している。適切な呪いをかけてしかるべき儀式をとりおこなえば、間違いなく欲する結果が生じる、ただしもっと上手な仲間が呪いをかけて邪魔をし、こちらの魔法を解いてしまわなにかぎりは、と魔術師は考えている」と。したがって、魔術は想像的な決定論肯定の立場に立っているのである、この想像上の決定論が、現実の決定論の認識がある程度は準備するのである。

(d) 最後に、芸術の起源もまた疑いなく魔術にある。

最初の彫刻はたぶん呪いのための人形であろう。先史時代の岩窟内の壁画は魔術的慣習と結びついているらしい。洞窟の壁に描かれた狩猟の場面にはほとんどの場合、傷ついたり畏にかかったりした動物が描かれている。このような場面を描き出せば、大猟は確実に、と呪術師は信じていたにちがいない。さらに注目すべきことは、描かれている雌がたいてい子を孕んでいることだ。これは明らかに、獲物の繁殖つまり食糧補給を常に確実に保証する、多産の魔術的儀式と結びついている。

こうして私たちは、技術であれ宗教であれ、あるいは芸術であれ、人智の生み出したあらゆるものが根本的にどういう意味をもっているかに——それらに共通する魔術的起源を通して——気づくのである。これまで人間は事物の外観の受動的見物人に甘んじることは決してなかった。アランの言うように「物を何一つ教えない経験の雨」をただ浴びるだけでは、人間は決して満足しなかったのだ。人間はこの世界を解釈し、この世界を変革するために、この現実世界と常にある距離を保ってきた。動物がこの世界にただ現存し続ける

だけなのに、人間はこの世界に距離を保ち、この世界を手はずけるために世界を自分の精神の内に再現するのである。人間が抱いた最初の世界像が神話的なものであり、世界に対する働きかけの最初のやりかたが狂気じみていたことは確かである。だがまさしく、このさまざまな原初的観念のもつ想像的な特質は人間精神のダイナミズムを浮彫りにするものであり、この精神のダイナミズムは世界を眼前にし、自分が行動するに際して、アプリアリな観念を投影するのである。人間は静的に物を見たり、受動的に事物の影響を受けたりしているだけでは満足しない、眼に見えるものの奥にその秘密を想像し、考え出し、探し求める唯一の生物なのだ。かくして魔術は——その常軌を逸した最悪の形態においても——すでに理性の自律を垣間見させるのである。

§ 2 技 術

技術がなぜ魔術から分化したかといえば、それはもちろん、技術がもたらす結果によってであるが（成功ということが規準になって偶然に発見された技術がただちに保存される）、それと同時に技術の内包する方法というものの特性にもよる。もともと未開民族の場合、自然にそった方法と神秘的な力を利用する方法との差は、私たちとは異なって、明らかでない。たとえば発火法の発見は、それを創出した人びとのきもをつぶしたに違いない。二箇の火打石を打ち合せて発火させることは、敵を呪縛することに劣らず不可思議なことなのだ。ここから、偶然に発見された方法の「聖化」が生じ、火守りには長い間儀式がつきものであった。⁽¹⁾だが大部分の技術的方法は——初めは常に魔術的

(1) 食物を煮炊きし、暖を取り、暗闇を照らし、周囲を徘徊する

野獸を脅やかす火は人類文化が獲得した最も貴重なものの一つである。火の強迫観念は長い間人間の想像力にとりついていた。十七世紀においても——村の住民や家族数ではなく——個々人の集合体の象徴である「かまど」の数が未だ数えられていた。

儀式がつきものではあったが——本能的な、最初は無反省な実践から生じる。道具が人間の諸器官の延長である、とはしばしば指摘されたことである。棒は叩いたり、掻き分けたりする腕の延長であり、釣針は曲げられた指の延長である……。だから技術にはその生物学的起源というものがあ、技術とは、どんな生物にも備わっている環境への自然な適応能力が、知性をそなえた人間という存在の内で、開花したものに他ならないのである。

ただし魔術がここに介入せず、自分の力を誇る人類の精神の高揚が保たれなかつたなら、技術は途中で挫折し、決して進歩することもなく、本能的な慣習の状態に留まっていたであらう。時代が下って、科学が魔術のあとを引き継ぐ形になった。主観的にいえば、その機能は同一といえる。すなわち科学は、最初は本能的な実践でしかなかった技術に、人間特有の刻印を押すのである。いずれ私たちは、科学が、自然発生的技術の効力を絶えず高め、この種の技術をいかに変革し、激変させたかを見ることになる⁽¹⁾。

さしあたりは、技術が人類文化の最も華々しい表現形態の一つだ、という考えを心に留めておこう。先史

時代の伝統的区分は、技術的進歩の諸段階により正確に定められる。すなわち打製石器時代、磨製石器時代、金属器時代である。約一万年前の農業—畜産複合技術の出現はおそらく、そのもたらした驚くべき結果によって、人類史上の最重要事である。植物を採集する代りに栽培し、狩猟をする代りに飼育するようになった時から、人間は造物主的自然にとって代り、自然の模倣をし、自然を変革してきたのである。耕作と牧畜は互いに補いあい（家畜を飼育するためには牧草を栽培せねばならないし、逆に種蒔きや収穫のために役牛・役馬を飼育する必要がある）、また耕作・牧畜は数多の技術を必然的にもたらした。家畜の飼育には困いを作らねばならない。このことは材料の準備と運搬が必要であることを意味し、また運搬には道路作り、船の建造等が要求される。このような多様な技術の秩序立

(1) 最初に魔術が、ついで科学が、技術に急激な変化をもたらしたにもかかわらず、技術は生物学的適応の最も洗練されたやりかたであることには間違いない。オスワルド・シュペングラは、技術は「生命のなす策略である……。自然の支配を目的とした術策という立場からみれば、最古の武器やずるがしことと、今日自然に対して使われる種々の型の機械との間には、兩者をつなぐ道がある」と記している（『人間と技術』）。

った連繋はもうすでに複雑な社会組織を必要とし、分業を生み出した。農村共同体は自衛組織をもたねばならない（そして、こんどは軍事技術が冶金術研究の原因となる）。人間集団が一ヶ所に集中し、人的・物的資源が増大すると指導的特権階層が形成され、種々の職業（窯業・織物業・医療技術）が組織され、続いて天文学や暦作成に従事する司祭が早々と出現する。技術の進歩が精神生活の密度を高めると、こんどは後者が新技術を開発するのである。文字の出現は——中国においても地中海周辺においても——宗教的・政治的関心と結びついているように思える（寺院での帳簿づけ、王朝の系譜作製等々）。

以上のようないくつかの例は、技術の進歩がその他の文明の諸形態の進化と密接に結びついていることを、十分に示している。だが今日に見られる技術の驚異的發展と、そこからしばしば生じる不均衡と不安（産業による水の汚染、食品の組成変化、流れ作業、失業、産業革命による社会的混乱など、恐ろしい武器については言わずもがなである）が、技術に対する不信と反発を若干のヒューマニストの胸に植えつけたのである。人間は魔法使いの弟子の役割を演じてしまい、技術は

怪物のように発展してもはや制御不能となり、いわば文化の外に位置することになるというわけだ。だが実際問題としては、伝統的な人文主義者もまた部分的にはこの混乱に責任がある。彼らは自分達の精神的関心事の内に技術的知識が入りこむことを拒否し（「古典学級」の教育を受けた多くの人文主義者が「近代学級」の教育に対して示す軽蔑の念を考えてみるがよい）、技術者の活動の「分離」を促進する。シモンドンがみごとに見てとったように（『技術的事物の存在様態について』、彼らの偏見に見られる感情的な激しさは、次のような彼らの明白な矛盾によって明らかである。つまり彼らは、機械を人間的意味合いの欠けた単なる物体とみなして軽蔑する。それと同時に、ロボットが私たちの安全を脅やかす悪魔に似た精神的存在でももあるかのように、ロボットが敵意を有していると思うらしいのである。だが現実のさしせまった問題は、ヒューマニスト的文化と技術者の文明の融和なのである。優れた人びとがこの問題に取組んでいるが（『ピエール・デュカセ『技術と哲学者』、人類の未来の成否はあけてこの点にかかっている。

§ 3 宗教

長い間私たちはラテン語の「レリギオ」宗教（心）を動詞レリガーレ「結びつける」から派生したものと考えがちであった。このような語源は、宗教が何よりもまず人間を神性に結びつけるきずなである、と考えられるのに便利であろう。だが今日の言語学の立場から言えば、この語源はもう受け入れられない。今日では（キケロがすでに気づいていたことだが）レリギオはネグレゲーレ *neglegere* に対立する動詞レレゲーレ *relegere* から出ていると考えられている。それはちようと注意、尊敬がぞんざい、無関心に対立するのと同じことである（私たちは「細心な心遣い」とか「名譽礼讚」、とかという言い方をする）。レレゲーレという動詞は末期ラテン語でコレーレの意味を帯びた「崇拜する」「激しい情熱を感じる」の意である。たしかにこのような細心とか尊敬とかという考え、あるいは（超越的）存在や人間の運命に価値を認めることは宗教にとって本質的なことである（神聖なものか

存在し、またそれとともに、禁じられ、容認されないもの、「タブー」が存在すると信じる者は、それだけですでにごく広い意味での「信者」なのだ。だが、上述の間違った語源も宗教の真の奥深い定義を暗示していたといえる。「われわれはなにかに依存しているのだ、という絶対的な感情の内に宗教は存している」と、かつてシュライエルマッヘルは記している。人間は自分で自分に存在を付与したのではない。人間は自分をはるかに超えるいろいろな力にとり囲まれながら進化してゆくのであり、これらの力のもつ打ち克ち難い影響力が人間におのずと恐怖と尊敬の入りまじった感情を吹きこむのである。

宗教的思考は、他方「超自然」という観念に結びつく。少なくとも事物の真の意味は、その事物の日常的外観に存してはいないという気持、「背後の世界」というものが存在し信者はこれと交渉を持ちうるという気持、と結びつく。経験的で非宗教的な現実を超えて、しかもおそらくはそのような現実の源に、信者の到達しうる神聖な領域が存しているのだ。スピノザのように、神と自然を混同する汎神論的神秘主義者達さえこの区別にとらわれている。スピノザの言う真の信者は、

外的無秩序、多様な出来事、「所産的自然」の「有限的様態」の奥には能産的自然の深い統一性が秘められていて、この統一性と「知的愛」によって結ばれることが大切だ、ということを理解している。だが、神に関する哲学的考察の内に宗教の起源を求めめることは適当ではない。哲学者達の神は、未だかつてどんな宗教をも生み出しはしなかった。事実、近代のすべての主要な宗教は己れの起源を啓示に求めている。キリスト教徒の神は聖書を通して、信者に語りかけた。回教徒の神はコーランを通して、ヒンズー教の神はヴェーダを通して、である。神が聖なる書物を通してその姿を現わさざるを得なかったのも、それは自分の力、自分の感覚、自分の理性のみに限定された人間が、自分ひとりでは、宗教的な真理と価値のもつ豊かさを発見しえなかつたからである。この意味で、司祭、司教等、信者のために聖界と俗界との橋渡しをする人びとは、特殊な才能を付与されて、神秘的で神聖な事象に満ちた世界に近づく魔術師の直系のように思えるのである。⁽¹⁾

だが宗教は、その本質において根本的に魔術と対立する。魔術師が技師たらんと願っていることは忘れな

いでおこう。魔術師は唱えごと、呪文によって精霊の世界に働きかけ、これを手なずけたり、意のままに動かしたりすることができると信じている。魔術師とは

(1) それゆえあらゆる宗教の源には、宇宙の神秘という感情が本質的に見られるのである。十八世紀という時代は宗教を信念や俗世の利害から派生するものと考えがちであり、宗教を何一つ理解しなかつた(ヴォルテールは「宗教を発明したのはそもそも誰だったのであろう? そいつは馬鹿と出くわした最初のペテン師だったのだ」と言っている)。宗教は、その起源においては、自分達の支配権を維持しようとする強者の打算ではなかつた。ましてや有用性や衛生に関する合理的な捉と結びつたものでもなかつた。ルナンは、旋毛虫や癩病への恐怖がもつたらの原因で、ヘブライ人が豚肉の食用を禁じたのだと素朴に信じていた。だが衛生観念というものはずっと後の時代のもので、聖書で、病気を何らかの食物の摂取に帰している箇所は全くない。本当のところは、ヘブライ人が豚を食べるのを絶つたというのも、それはたぶん、約一万年程、彼らの祖先が豚を神聖な動物、トーテム、すなわち超自然的価値と超自然的現実の表現、象徴とみなしたからであろう。金曜日に魚を食べる習慣はキリスト教徒の専売特許ではなく、敬虔なユダヤ人にも見られ、キリスト到来よりずっと以前からの習慣である。それは実際にはシリアの古いトーテムの残存なのである。いずれにせよ、この習慣は食養生の関心とは何の関係もない。今日私たちが宗教を「説明する」こと、すなわち非宗教の関心および活動から宗教を導き出そうとする道を捨てている。むしろ宗教を「理解する」こと、宗教が伝達する意味と価値を捉えることに努力を払っている。これが宗教に関する「現象学」の大望なのである。

妖術を用いて神を支配し、神を鎮つなごうとするものである。だから、あらゆる宗教が魔術を不敬なものとみなしたことは納得できる。信仰とは、何よりもまず神への信頼を行為で示すことである。宗教心の篤い人は謙譲と崇拜の気持から、主の御心の前にひざまずくのであり、神の力を自分の意志に従わせようとする。ことは程遠い。しかしながら、若干の民族学者は魔術の「呪い」と宗教の「祈り」とを関係づけている。祈りとは神に願いをかけることではなからうか？ 神の加護によって何か利益を得ることを目的としているのではなからうか？ 信者は捧げ物をしたり、善行を積んだりすることによって自分の信じる神に「魔術をかけ」、その代りに精神的な幸福、否、物質的な富さえも得ようと期待しているのではあるまいか？ だが実際は、祈りの内に呪文を見ることは祈りの本質を曲解することであろう。まず第一に魔術の呪文は自称決定論に依拠しており、呪文それ自体に有効性をもたそう（技術的方法のごとく）としている。これに対して祈りは、信者の心のあり方によってのみ価値をもつもので、清い心の持主のみ、願いがかなえられるであろう。さらに真実の祈りとは、神の意志を耐えしのぶ勇

気以外には何ひとつ自分のために求めないものである。御意ごいの行われんことを。これこそ信者が主にかける願いである。「生来することはすべて崇拜すべきものである」とテイヤール・ド・シャルダンと言っている。真に宗教的な祈りとは、崇拜の行為以外の何ものでもない。神に雨乞いをしたり、晴天を願ったり、試験の合格や健康を願う信者は絶えず宗教を魔術に墮落させる危険を犯しているのだ。

§4 科学

魔術的活動の内に私たちは二種の願望を見てきた。一つは実践的なもので、自然に直接働きかけ、事物を手にとって動かそうという意志であり、他方は観念的・理論的なもので、一つの世界像を作りあげ、共感・反感・象徴的類縁関係の法則により事物を解釈しようとする欲望である。実際には、魔術は自分のした約束を果たさず、人間の種々の欲求を呼び覚ますだけで、それを満足させてはくれない。これらの欲求は分化して、はっきりと異なった二種の文化形態を通して